

文芸

俳句

秋冷の俄にきたる山の宿

池田 逸子

岬鼻の低き灯台冬ざるる

伊藤 敬子

厩に押し戻されてタクシーへ

今関満喜子

木枯らしやシャッター街を吹き抜ける

魚地 照子

手のひらを広げしほどの熊手買ふ

江森 悦子

不耕地の増へて枯野の拡がれり

川島 通則

両総を映す流れや寒茜

向後 寛

上肢癒へて万事に追はれつ年迫る

越川せつ子

この町の火災を守る赤トンボ

小松 藤男

風去つて天空の碧柿熟るる

佐瀬 輝夫

星集くさざんか垣に花ひとつ

椎名万里子

十二月目にはみえねと急かされて

鈴木とし子

びっしりと書き込む暦十二月

鈴木 利子

浜風を好むかに風のひるがえり

玉虫 栗扇

心地良き鉄の音や師走空

土屋美枝子

ラジオから懐かしき歌賀状書く

土屋 義昭

雪のなき九十九里住み幸貰ふ

戸村 静華

極月や追い討ちかける総選挙

西崎さち子

忘れたきこと忘れ得ずすでに冬

早川 勇

先送りせしことばかり初時雨

藤田 雅夫

短歌

見上げるとごうごうと飛ぶ飛行機に

戦さの昔きびしき浮かぶ

鈴木 益郎

夫の居ぬ家はがらんと一人居の

声は出せずに音だけを聞く

内藤 くに

霜月もつごもりとなり又一つ

齢を増すにたゞ呆呆と

越川 福子

亡き友の面影浮かぶしみじみと

あたり静けく月冴ゆる夜は

土屋 好

歳晩の穏しき日和に思いたち

玻璃戸きしきし音たてて拭く

人目惹く落ち葉早めて柿数多

見事な眺め往還の道に

伊藤 定男

年ゆえと言われ詮なく腰痛に
医者をうらむも我慢なりしか

越川 義則

ロープウェイでくだる瞬間鳥になり

紅葉の森を見下ろしてあつ

八角 三枝

笑ひしわ深く刻まる円空の仏像に

いつかわれも笑みをり

西山満里子

氣にかけし手紙の返事書き終へて

足どり軽くポストへ向かふ

田崎 尚美

陽の温みはつか残せる大根の

もみじおろしに夕餉とのふ

青木 秀子

北風の吹く中ともる外灯を

温しと見つつ歩みゆくなり

押尾 輝子

テレビより流るる「古城」メロディに

好みし父の面影の頭つ

芹川 初子

遠見ゆる山の輪郭浮き立たせ

夕日入りゆく信州の秋

鈴木まさ子

散歩する吾を気にかけて追ひ来しか

孫は昼餉の近きを言ひぬ

平山 芳子

西を向く白壁朱に染まりきて

松丘園のひと日暮れゆく

斉藤つね子



こうほう 博物館 58

角のあるシシ頭

正月になると、新年のお

祝とその年の幸いを祈願し

て、各地で獅子舞が舞われ

ます。獅子舞の多くは太神

楽と言つて、伊勢神宮の神

人が伊勢神宮の信仰を広め

るため、各地を遊行して

舞ったのが始まりと言わ

れ、その獅子頭は中国から

伝わった獅子をかたどった

大きめのもので、それを被

り、胴は唐草模様様の布を

纏つて、歯を噛み合わせて

鳴らしながら舞うのが特徴

です。

ここに紹介するシシ頭に

は角があり、また小ぶりな

太神楽の獅子頭とは異なり

ます。これはシシでも鹿舞

で、太神楽よ

りも古くから

伝わるものと

言われます。

この鹿頭は、

屋形の四社神

社に伝わり、

三点が残され

形四社神社では昔、この鹿

頭を付けて鹿舞が舞われて

いたと言われますが、今は

誰も舞を知る人はいませ

ん。三匹鹿が舞う鹿舞は県

内でも船橋や酒々井で今も

舞われていますが、やはり

東北が多いようです。しか

し一昨年の震災でできなく

なつてしまったところも多

いと聞きます。この鹿舞は

狩猟と関係すると言われ、

もしかすると縄文時代から

の名残なのかもしれません

ん。このような古相を示す

鹿頭だけでも残されている

こと自体、文化財の奇跡と

言えます。

